

第十五回 地盤の会 開催報告

地盤の会委員長
佐々木 勉

通常総会に先立ち第
十五回地盤の会は、次の
四名の方々に講演をい
ただきました。

の応用)

上出定幸氏

(西日本高速道路
エンジニアリング
関西(株)技術顧問)

「地震危険度における
道路盛土のスクリー
ニング手法」

川井田 実氏

(中日本ハイウエ
イ・エンジニアリ
ング名古屋(株))

「舞鶴若狭自動車道
若狭地区の軟弱地盤
対策」

理工・土木の新任助
手(熊野先生、野村先生)
の挨拶に変えてそれぞれ

川井田 実氏

(中日本ハイウエ
イ・エンジニアリ
ング名古屋(株))

「舞鶴若狭自動車道
若狭地区の軟弱地盤
対策」

理工・土木の新任助
手(熊野先生、野村先生)
の挨拶に変えてそれぞれ

川井田 実氏

(中日本ハイウエ
イ・エンジニアリ
ング名古屋(株))

「舞鶴若狭自動車道
若狭地区の軟弱地盤
対策」

理工・土木の新任助
手(熊野先生、野村先生)
の挨拶に変えてそれぞれ

川井田 実氏

(中日本ハイウエ
イ・エンジニアリ
ング名古屋(株))

「舞鶴若狭自動車道
若狭地区の軟弱地盤
対策」

の研究内容について発表
頂きましたが、今後のご
活躍を期待します。

上出氏の講演は、過去
の被害事例を基に中山間
部での地震時の道路盛土
の被災危険度を数値化
し、緊急度、優先度を考
慮した効果的な防災対策
が可能となるマクロ評価
法についてお話を頂い
た。道路盛土の地震危険
度は従来、軟弱地盤上の
盛土に被害が多く、この
点に主眼が置かれていた
が、二〇〇四年の新潟中
越地震以降基礎地盤の良
好な中山間部にも被害が
多発し、このような状況
から本手法が提案された
とのご説明でした。一番
問題となるのは「湧水」
と「変状」のようです。

川井田氏の講演は、自
然含水比三百〜四百%の
腐植土や五十〜百%の粘
性土が三十〜四十メート
ル堆積する軟弱地盤上
に計画盛土高さ七〜十一
メートルの道路盛土を
行ったところ、沈下が最
大十一メートルあったお
話を頂いた。高速道路は
今までの基本はパーチカ
ルドレーンを使わず、盛
土を行ってきいているが、
維持管理を考えるとパー
チカルドレーンを用いた
ところの方が、将来的な
変状が少なくなるとの知
見が得られたことの説明
がなされた。後半では、
十一メートル沈下した若
狭での対策工の説明で
あったが、試験盛土でサ
ンドドレーン工法では側
方変形対策、過剰間隙水

の消散速度が十分では
ないことが分かり、工期
的な理由もあり真空圧密
工法を採用し、盛土速度
が三センチメートル/日
から八センチメートル/日
となり、側方変形も工
期的な問題もほぼ解決で
きたとの説明でした。

高速道路の技術は、一
般道路やその他の盛土に
参考になる事例が多いで
すが、長期沈下も考慮す
るとパーチカルドレーン
の効果が大きいく、盛
土高さ沈下がほぼ同じ
場所でも十分施工可能で
あること、前半の盛土に
対する水の影響が大きい
など、これらの知見は震
災復興でも大いに参考に
して頂きたい。

ご講演いただいた皆様
には、この後に開催され

た懇親会にもご参加頂
き、個別的な質問や意見
をまじえながら懇親を深
めた次第です。土に関わ
らない土木技術者はい
ます。

は、去る平成二十五年六
月二十九日(土)に理工
学部駿河台校舎一号館四
階一四二教室において開
催されました。開催報告
を幹事として活動をされ
てきております脇正鋭氏
と森正忠氏(ともに昭和
四十二年卒業)にお願
いしましたので、紹介さ
せていただきます。

日大土木構造の会
第一回 研究会報告

幹事 脇 正鋭
森 正忠

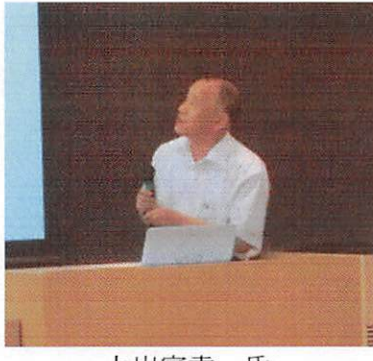
東北の震災をきっかけ
に、耐震、防災、減災、
長寿命化、施工情報処理
等、構造分野においても
新しい要請が高まってき
ております。そこで、日
本大学名誉教授竹澤三雄
先生の発案により日大土



熊野直子 助手



野村瞬 助手



上出定幸 氏



川井田 実 氏

日大土木・構造の会 設立及び発表会開催

本学の竹澤三雄先生
(日大土木会会長)及び
山崎淳先生(日本大学名
誉教授)が中心となり、
この度日大土木構造の会
を設立されました。
この会は、日大土木会
の組織ではなく独立した
組織としてスタートいた
しました。日大土木会
は、日大土木構造の会を
支援していく予定にして
おります。
第一回目の研究発表会

は、去る平成二十五年六
月二十九日(土)に理工
学部駿河台校舎一号館四
階一四二教室において開
催されました。開催報告
を幹事として活動をされ
てきております脇正鋭氏
と森正忠氏(ともに昭和
四十二年卒業)にお願
いしましたので、紹介さ
せていただきます。
日大土木構造の会
第一回 研究会報告
幹事 脇 正鋭
森 正忠
東北の震災をきっかけ
に、耐震、防災、減災、
長寿命化、施工情報処理
等、構造分野においても
新しい要請が高まってき
ております。そこで、日
本大学名誉教授竹澤三雄
先生の発案により日大土



竹澤三雄 会長



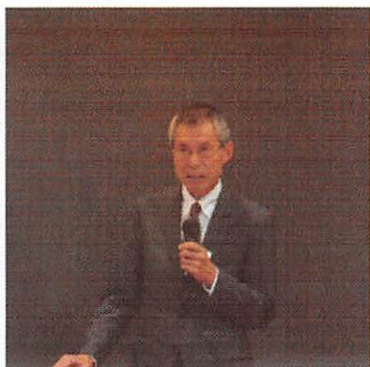
司会：山崎 淳 先生



前川宏一 先生



池田尚治 先生

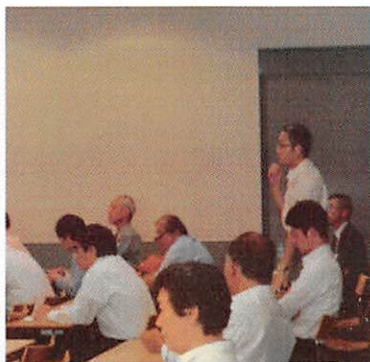


脇 正鋭 氏



森 正忠 氏

【日大土木構造の会・問い合わせ先】
森 正忠 氏
E-mail: m.mori@cosmogkn.co.jp



会場風景

木構造の会が発足することになり、第一研究会を平成二五年六月二十九日に開催致しました。

観点からの平成防災十七年条憲章の策定」と言う題で講演され、中でも「東北地震の津波で、二リットルのペットボトルが手元になれば浮力で多くの人命が救われたかもしれない」、「ペットボトルによる生き抜き実用化作戦」のお話は、誰でも簡単にできることであり、かつユニークな発想で興味をひきました。また、

東京大学前川宏一教授からは「PC上部工構造の長期変形に関する最近の話題」についてのお話であり、長スパンPC橋では長期にわたると、理論計算値の3倍も撓んでくること、技術者によつては経験により計算値の2〜3倍のキャンバーをつけている事を事例に上げて、長寿命化に向けて工学理論と過去の知見を有機的に結合した知識ベースを形成して将来予

想を図るべきであるとの新しい考え方を示されました。会員からは、「鋼橋技術のゆくえ」と題して国土交通省が推進するCIM (Construction Information Modeling)、「斜角門型カルバートの開発」といった最新技術についての発表、また「防災・減災を踏まえた橋梁計画」、「社会インフラとしての原子力発電所」といった最近のニュースに関する研究発

表があつた。特別企画として、(C)で中心的な役割を果たす「プログラムモデル(CM)」のデモンストラーションが行われた。第一回目の研究会にもかかわらず、約五十名の参加者で会場もほぼ埋め尽くされました。研究会終了後は、日大土木会・地盤の会と合同で懇親会を行い、盛大なうちに幕を下ろしました。

【プログラム】

- (司会) 山崎 淳 日本大学名誉教授
- 「日大土木構造の会について」 竹澤三雄 日本大学名誉教授
- 「土木工学の観点からの平成防災十七年条憲章の策定」 池田尚治 横浜国立大学名誉教授
- 「PC上部構造の長期変形に関する最近の話題」 東京大学教授 前川宏一
- 「日本の鋼橋技術のゆくえ」 コスモ技研(株) 社長 森 正忠
- 「小規模橋梁への斜角門型カルバートの利用」 共和コンクリート工業 三浦昌男

「防災・減災を踏まえた橋梁計画(啓開)について」 国際航業 鈴木紳也

「社会インフラとしての原子力発電所について」 エンジニアリング開発(株) 元社長(元三菱原子力工業(株)) 脇 正鋭

【特別企画】 次世代CAD「ProSteer」のデモンストラーション 提供 コスモ技研 ベントレー・シズテムズ

事務局より

第十五号の会報は、平成二十五年通常総会・特別講演会・研究発表会の報告を掲載いたしました。併せて皆様のお手元に会員名簿も届いていることと思ひます。ご意見及び会員情報の変更等ありましたら日大土木会・事務局までご一報願ひます。アドレスは、以下の通りです。

dobokukai@vivil.snhon-u.ac.jp (録)